

7月研修会

「子どもはどんな姿を見てもらいたいのだろう
～PBIS の根幹理念と実味～」

講師：中川 優子氏（アメリカ合衆国イリノイ州 シカゴ ホワイトリー小学校 教員）

日時：7 月 26 日（日） 9:00～12:00 形式：オンライン

7 月研修では、アメリカで 10 年以上 PBIS を実践されている中川優子先生から、アメリカの教育事情、PBIS の基礎概念や 3 層構造、望ましい行動を生み出す視点など、理論的かつ実践的なお話を伺いました。

○望ましい行動は教えることができる！

アメリカでは、さまざまな法律のもとで学校や教職員には「すべての児童生徒の学力の成長を保証する」ことが求められており、その達成状況を学校全体で評価する仕組みが整えられています。その中で、多層的支援システム（MTSS：Multi-Tiered System of Supports）を基盤とし「学習」「行動」の両面から根拠に基づいた支援が実践されています。

PBIS（Positive Behavior Interventions and Supports：すべての児童生徒のための行動介入と支援）は、学校全体を対象としたエビデンスに基づく包括的な支援システムです。支援は、一次支援（Universal Tier）、二次支援（Secondary Tier）、三次支援（Tertiary Tier）の 3 層構造で行われ、「約 80%の児童生徒は一次支援のみで十分な支援を受けられ、約 15%は二次支援、約 5%は三次支援を必要とする」という考え方に基づいています。

中川先生が勤務されていた学校では、それぞれの支援段階ごとに担当する教師グループが設けられ、学校全体で組織的かつ継続的に支援を実施されていました。特に印象的だったのは、PBIS では教師の勤や経験だけに頼るのではなく、「データに基づく意思決定」を重視している点です。児童生徒の行動データを継続的に収集・分析し、その結果をもとに支援方法を決定するとともに、介入後にはデータを用いて効果を検証し、より良い支援へと改善していきます。

また、「行動」を観察できる（Observable）・測定できる（Measurable）・達成できる（Attainable）ものとして捉え、学校全体で共通の目標として支援していくことが重要視されています。支援を個々の教師の経験や勤に委ねるのではなく、学校全体で共通理解をもち、データに基づきながら組織的に実践していく仕組みは非常に印象的でした。

日々子どもへの関わり方についても、多くの学びがありました。例えば、子どもが望ましい行動（ターゲットとしている行動）を示した際には、「できたね」と評価するだけでなく、「ありがとう」と感謝の気持ちを伝えること、一方で、不適切な行動が見られた際には叱責するのではなく、「それは不適切な行動です」と、どの行動が望ましくないのかを明確に伝え、適切な行動へと導くことが大切であると教えていただきました。

アメリカからの中川先生の情熱やエネルギーを全身に感じ、あっという間の 3 時間でし
た。 中川先生、ありがとうございました。



○参加者から（一部抜粋）

- ・ 大変勉強になりました。すぐに実践できそうな内容ばかりで大変参考になりました。学校全体の様子について、自分の中で『これはどうなんだろう』と葛藤していたことも、今回のお話を伺い、解決することができました。今回学んだことを、学校全体でも共有し、今後の実践に生かしていきたいです。ありがとうございました。
- ・ PBIS の理念や三層構造、実践例を通じて、子ども主体の前向きな行動支援の重要性と、学校全体で協働しながら継続的に改善していく姿勢の大切さを実感できる研修でした。ありがとうございました。
- ・ PBIS について、私はこれまで「望ましい行動を支援する教育手法」という程度の認識でしたが、今回の講演を通して、データ分析に基づいて継続的に改善を行うシステムであることを理解し、その認識が大きく変わりました。
- ・ 実際の現場でのお話を聞くことができてとても勉強になりました。日本とアメリカの学校を取り巻く制度の違いについて考えることができました。PBIS という考え方に初めて出会ったのですが、積極的に導入されていったら良いなと思いました。定着までの道のりは長いかもしれませんが、子どもたちの前に広がる環境が変化してより過ごしやすい学校を作れたら良いなと思いました。

次回は、

番外編「非行のメカニズムの理解と支援者としてのあり方」

日時：8月2日（日） **13:00～16:00**（午後開始です）

場所：対面と Zoom によるハイフレックス研修

講師：小西好彦 氏

（医療法人 スマイルクリエイター、奈良県教育委員会 SCC、元矯正施設 教育担当）

内容：少年非行は、なぜ起こるのか。

家族、学校、友人、地域社会との関係から、少年が「非行」を選択する背景について考えます。また、刑務所から社会へ復帰する人々を、学校や地域、そして家族はどのように受け止め、支えていけばよいのかを、豊富な実践経験をもとにお話しいたします。

